

生化学若い研究者の会「第57回生命科学夏の学校」開催報告

戌亥 海¹, 内藤 里佳²

(¹生命科学夏の学校実行委員長 九州大学, ²事務局長 東京大学)

「生化学若い研究者の会（略称：生化若手の会）」は、日本生化学会後援のもと、生命科学系全般の研究に関わる大学院生を中心に構成されています。当会では、北海道から九州までの八つの地域でシンポジウムやセミナーなどを開催する「支部活動」、ライフサイエンス誌へのコラム連載や一般向け書籍などの執筆活動などを行う「キュベット委員会」、そして年に一度、全国の若手研究者が一堂に会する滞在型研究会の「生命科学夏の学校」の三つの活動を行ってまいります。

今年は、9月1日～3日に「第57回生命科学夏の学校（以下、夏の学校）」を、白浜荘（滋賀県高島市）にて開催しました。幅広い年齢層・研究分野の参加者が、全国から132名（内、講師11名）集まりました。

第57回の企画趣旨

本年度は「僕らは出会い、学び、議論する。新しい○○がそこにある」をキャッチフレーズに、「次につながる夏学」をテーマに掲げて企画を行いました。多様な研究分野に所属する若手研究者が一堂に会するこの夏の学校で、広い知識を身につけ、最先端の研究に関する議論を交わす機会を提供したい。そして、夏の学校で得られた経験を自身の研究内容や今後のキャリアパスに繋げていただきたい。このような思いの下、第57回生命科学夏の学校を開催しました。

ワークショップ

夏の学校のメイン企画であるワークショップでは、8名

の先生方をお招きしました。昨年ノーベル医学・生理学賞を受賞された大隅良典先生とともに、オートファジーについて初期から研究をされてこられた吉森保先生（大阪大学）による基調講演を始め、TALENやCRISPR/Cas9システムを用いたゲノム編集技術に関する講演やアストロバイオロジーに関する講演、さらには水族館と共同で海洋生物の調査をされている先生方による講演など、多様なお話を聞くことができました。また2日目には「研究者のための伝える技術：『遺伝研メソッド』による研究プレゼンテーション」、「サイエンスライティングで魅せる——科学を社会に伝えるために」の二つの実習型ワークショップを開催し、講師の先生から学んだことをその場で実践しながら身につけることのできる機会を設けました。

シンポジウム

今回のシンポジウムでは、近年技術的發展が著しいゲノム医療における生命倫理について、多角的な視点から考えることを目的としました。生命科学の研究に携わる我々は、技術に対する専門的な知識は身につけているものの、倫理的側面を考える機会が少ないことに問題意識を感じ、本シンポジウムを企画しました。

まず、第一部では、倫理・臨床・経済の専門家からの講演により、現状のゲノム医療における技術面や経済評価、倫理面といった様々な観点からの知識を共有しました。山形崇倫先生（自治医科大学）からは、実際にゲノム治療を行った患者さんの様子を動画でご紹介いただきました。患者さんの回復ぶりには会場からも大きな驚きが起こり、改



写真1 集合写真



写真2 ワークショップ



写真3 シンポジウム

めてゲノム治療の威力を感じました。医療経済学をご専門とされる福田敬先生（国立保健医療科学院）には医療技術の経済的な評価方法を、生命倫理をご専門とされる浅見昇吾先生（上智大学）にはゲノム医療における倫理的な諸問題について、ご講演いただきました。参加者から、費用対効果の算出方法や、ゲノム情報の取り扱いなどについての知識を身につけることができたとの声が聞かれました。

第二部では、ゲノム医療における現状の問題点や今後の展望に対して、班に分かれて討論しました。また、その結果を会場全体に発表し、先生方からのフィードバックをいただきました。

講演・討論を通じて、参加者が「ゲノム医療における倫理問題」をより身近なものに感じ、ゲノム医療を行う際の問題点やその打開策、ゲノム医療の展望などを真剣に話し合う様子が見られました。講師の先生方のお話から多角的に考えることができたことや、難しいテーマながら議論が白熱したことなどが事後アンケートからも窺えました。

研究交流企画

参加者同士の交流を図る研究交流企画として、例年行っている「研究交流会」「自由集会」「ポスターセッション」の三つの企画に加え、今年は開校式前に新たに「アイスブレイク」を設けました。今年の夏の学校では「出会い」をキャッチフレーズに掲げていますが、例年、参加者がお互いのことを知らない初日のうちは交流が活発ではありません。そこで、開校式の前に参加者を少人数のグループに分け、一風変わった自己紹介を取り入れることで参加者同士の交流促進を図りました。その結果、初日の早い段階から活発に交流でき、事後アンケートからもアイスブレイク企画が参加者同士のコミュニケーションを促進したことがわかりました。

1日目に行った「研究交流会」では、参加者同士がどのような研究を行っているのか、自己紹介を交えながら話す



写真4 研究交流企画

機会を提供し、参加者同士がより深く交流できる企画となりました。2日目に行った「自由集会」では、有志からテーマを募集し、小グループに分かれて討論・交流を行いました。「基礎研究vs応用研究」「海外留学」といった学術的な話題から、「学生のお金問題」「健康を維持するために」のような私生活に関するものまで、幅広いテーマが集まりました。3日目の「ポスターセッション」では、様々な研究分野に属する参加者同士の研究発表が行われ、活発な意見交換が行われました。各日夜遅くまで参加者同士の交流があり、時には講師の先生方も交えて白熱した議論が交わされていました。

夏の学校の先にあるもの

今回の夏の学校では、会期中の交流や学びだけではなく、会期後に参加者の「次につながる」ことを意識しました。多様な分野・所属の参加者同士の出会い、それぞれの分野で第一線の研究をされている先生方によるご講演、そしてシンポジウムや研究交流企画を通して多くの議論がありました。今回の出会いや学び、議論を通して得たことを、自身の研究生活やキャリアパスを考えるうえでの材料にしてほしいと考えています。今回は特に学部生の参加者も多く、自身の研究テーマを考えるきっかけになったと期待しています。夏の学校での出会いが、各地域での支部活動や学会での交流に繋がり、また来年の夏の学校で再会できることを願っております。

最後に、今回の夏の学校の開催にあたり、多大なご支援をいただいた日本生化学会をはじめとする法人・企業の皆様、ご講演いただきました先生方に心より御礼申し上げます。

（生化学若い研究者の会・第57回生命科学夏の学校についてはこちら：<http://www.seikawakate.org>）